
家庭教師ヒットマン アニメ188話妄想

久遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家庭教師ヒットマン アニメ188話妄想

【Nコード】

N1608M

【作者名】

久遠

【あらすじ】

アニメ家庭教師ヒットマンリボーン 188話から突発的妄想。
初代雲×大空十霧ってところです。BL仕立てなんで、無理な人止めといった方がいい。シリアス風味。

(前書き)

すみませんごめんなさい腐ってます。

月夜を見上げる影が一つ、寝静まった街の民家の上に佇んでいた。
「ジョット」

周囲に人影も無い虚空に向って、男が呟いた。次の瞬間、何も無い空間にオレンジの火が生じた。

その火は細長く伸び、瞬きの間もなく一人の男に変じる。その額に灯る火は先ほど男が生じたオレンジ。

その異様ともいえる光景は、しかしその二人を見たものならば納得することなのかもしれない。目視できる二人の身体は、その向この景色を透かしていた。

人はそれを幽霊と呼ぶ。もつとも、二人を知る関係者に言わせればそれも違うのだろう。“ボンゴレリング”の奇跡。“リングに宿りし記憶”。呼ばれ方は様々だ。

「どうした？アラウディ。珍しいな、お前が自らの意思で出てくるなど」

そう言つて覇気を宿したような眼差しを緩め、己を喚んだ者を見る。
やる。

だが、アラウディは顔を向けることなく相変わらず空を見上げる。その様子にジョットはあるかないかの微苦笑を零し、同じように空を見上げる。

対峙する二人は暫くそのまま時を過した。口を開いたのはジョットの方だった。

「スペードのことか？」

その名に、アラウディの肩が僅かに震える。

アラウディは内心で舌打ちした。他の者であれば分からないであろうそれは、聡過ぎる目の前の男に気取られぬ訳が無い。

苦虫を潰したような顔を、観念したように正面に向けると、其処には暖かい眼差しを向けるジョットがいる。その表情が、己にしか

向けられないものであると知っているアラウディは、僅かではあるが溜飲を下げた。

そのまま、腕を伸ばし己の胸に抱き寄せる。

ジョットも抗うことなくその背に腕を回す。

最早交わされることのない温もりは、しかし確かにお互いの記憶の中にあつた。

「ボクは・・・あいつが嫌いだ」

生前、それこそ本気の殺し合いを演じていた二人の不仲は、ジョットはおろかファミリー内で知らぬ者はいない。だからこそ、その言葉は日常的に良く耳にしていた台詞だ。

永らく聞くことのなかった台詞に、ジョットは喉の奥で笑う。

「クックククツ」

「何が可笑しいの」

ムツとしたような声が、益々ジョットの笑いを誘う。

アラウディは再び機嫌を悪くさせながら、腕の力を込める。

「だから君も嫌いなんだ」

それも、けして少くない台詞だった。

いや、少くないどころか会う度に言われ続けた言葉だ。

互いの立场上、会っていた回数は他の守護者の中ではだんとつで少ない雲と会う度、そして互いに言わぬ想いを確かめ合う度代わりのように囁かれた言葉。

それに、生前返していたように応えようと口を開いたジョットは、その顔を見てやめる。そして、代わりの言葉を口にした。

「そうか。俺はお前を愛しているぞ。ファミリーとしてでなく、な。アディ」

ファミリーのボスという立場から最期まで言えなかった言葉を、皮肉にも肉体の存在していない、けれど確かにある“今”なら言える。

二人きりの時に読んでいた愛称で本心を告げれば、よっぽどの事がなければあからさまに表情を変えることのなかったアラウディが

眼を見開いて驚きを露にする。

それに、悪戯が成功したような顔をして喜ぶと、アラウディは見開いていた眼を細め次いで強い力でその頭を引き寄せる。

「んっ」

艶のある声を見無視し、ゆうに一世紀ぶりの唇を堪能する。

感触こそ無いが、それでもそれはジョットとアラウディにとって二人で交わすキスに違いない。

「ふっ……ん」

「生意気だね」

至近距離から覗いた目は、心なしか薄い幕を張っている。

「あの男は嫌いだ」

再び同じ台詞を口にする。

だが、其処に含まれるのは、先ほどのような嫌悪でも憎悪でもなく、嫉妬だ。そして、どこか悔しそうな響き。

「アディ？」

それに気付き、けれどその感情の意図するところが分からず、ジョットは不思議そうにその目を覗き返す。

それを嫌うように、アラウディはジョットの顔を胸に抱き寄せる。

「君に引導を渡すのは、ボクだと思ってたのに」

本当に悔しそうな声に、今度は逆にジョットが目を見開いた。

「知って……」

スペードの本心を、そして己の弱さを。

消え入るような声に、耳横でギリツと言う音が答えを返す。

「すまない」

後悔を滲ませるジョットに、アラウディはその髪から顔を離し眉を寄せたまま否定する。

「違うよ。ボクは君が奴の思い通りに動いたことを言ってるんじゃない。ボクより先に奴が君を解放したことが許せないんだ」

力を、権力を、最強をと謳っていたあの男が、真に何を望んでいたかなど、同じ守護者であり、そしてあらゆる意味でライバルであ

ったアラウデイが分からないはずはなかった。

もしかしたら。そんな予感があった。それが確信に変わったのは、今日の――いやもう昨日と言うべきか――二人の言動。

裏切りを罵りもせず未だにスピードを認めるジョット、そしてとうに捨てたと思っていたあの時計を持っていたこの意味を。二人が醸し出していた空気に気付かぬはずは無い。

だからこそ、それを望んでいたがそれを出来ないでいた己の立場と心の弱さに憤りを感じずにはいけないのだ。

「どうして。あんなやつに」

悔しい悔しい悔しい。悔しくてたまらない。

力を有し、守ることを望み、けれど周囲がそれを許さなかった。

その力のみを認め、その想いと裏腹に肥大していく組織に心を痛めた誰よりも優しく、甘く、そして多くの者から怖れられた男。

その強さゆえに弱く、その優しさゆえにファミリィを見捨てる事が出来なかったボスに、終りを与えるのは己でありたかった。

何時の間にやら朝の気配を含む空が透けて見えるアラウデイの顔を見上げ、まるで癩癩を起こした子供のような男に、ジョットは苦笑する。

そして、そのまま爪先立ち嚙締めている唇に己のそれを重ねる。

「アラウデイ。おまえは雲だ。何者にも捕らわれることのない孤高の浮雲。だから、お前では無理だったんだ。俺の心残りの無いよう、ボンゴレを支え、守っていく者は」

悪を許さず、己とそしてその忠誠を誓う国家の正義を貫くこの男では、闇に染まりゆく彼の組織を自分の替わりに見守り、支えていくことなどできない相談だ。

何より、それをジョット自身が望まなかった。

そして、ジョットはもとより誰かにこの責務を替わろうなどとは思っていないかった。

だが、あの意地悪で捻くれた愛すべき息子は、それを許せなかつ

たのだろう。久方ぶりに相見えた己より年上で随分手を焼いたファミリーを思い、ジョットは苦笑する。

野心があり、力があり、そして方向性を誤ってしまった組織を背負い、それを潰さず、その重さに潰されず立っていける後継を見つけ出し、小さな本音と大きな建前を声高に叫び遺恨をより少なくし、そしてジョットが信頼できる自身を犠牲にしてボンゴレと言う血塗られた業を支え続けた不器用で可愛げない生き様は、正しく実態の掴めぬ霧といったところなのだろうか。

「アデイ。アラウデイ。お前はそれでいい。あれで良かったんだ」
幼子に言い聞かせるように、静に髪を撫ぜる。

「愛している。昔も今も。だから、自由であってくれ。お前はあなたの望むまま。永久に」

その声と共に、二人の影は薄くなる。と共に、明るくなり出していた東の空に陽が昇る。

消える一瞬、アラウデイはジョットの耳に顔を寄せる。

「」

その眩きに眼を見開いた表情を最後に、二人の影は消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1608m/>

家庭教師ヒットマン アニメ188話妄想

2010年10月8日13時44分発行